

系統的文献検索とシステマティック・レビュー

－図書館員の役割を考える－

諏訪敏幸

大阪大学大学院人間科学研究科・国立成育医療研究センター政策科学研究部共同研究員

研究過程における文献検索の役割は決して小さくない。学生の卒業研究から専門的な研究活動までどんな研究でも、研究を始める段階、そして考察を深める段階での文献調査が欠かせない。システマティック・レビューのように文献調査が研究そのものの重要な一部分を構成する場合もある。大学・研究機関あるいは企業の専門的研究部門だけでなく、行政組織や医療機関でも、政策研究、事業評価、地域サーベイ、臨床ガイドラインなどの研究プロジェクトや看護師の卒後3年研究などの教育的研究活動が広く行われている。本来ならこれらすべてが質の高い文献調査を必要とする。

しかし現実にはこうした研究活動の多くが、文献調査について問題を抱えている。深刻なのは、第1にこれではそもそも学術的研究とみなされない可能性があること、そして第2に、にもかかわらず研究の当事者自身がこれを問題として認識できていないことである。これには幾つか原因があるが、根本にあるのは、研究者が系統的文献検索について教育を受ける機会も経験する機会もないという、大学・大学院教育の現状である。

「検索」には発見的検索、系統的検索、確定検索などの種類があり、それぞれ目的も手法も異なる。われわれがネットでの情報入手やオンラインジャーナル・アクセスなどで日常的に経験する「検索」のほとんどは発見的検索か確定検索である。今日「検索」と言えばこれらを指し、多くの人はいそれ以外の検索をイメージすることすらできない。しかし研究場面でしばしば必要とされる系統的検索は、これらと性格を異にする。

ある特定のデータを釣り上げようとする発見的検索や確定検索に対し、系統的検索は全体的状況の把握を目的とする。検索の主要な目的はデータの縮約に置かれ、方法的には検索者のコントロールの下での網羅性・合理性・透明性が要求される。手法的には、主題検索・構成的検索が柱となり、試行錯誤が重要な位置を占める。一直線で結果に到達することをめざす発見的検索に対し、系統的検索は「めんどくさい」検索である。

系統的文献検索は、図書館の歴史の中から生まれて来たものである。技術的には図書館員が普通に実践し教えて来た検索手法の一部分にはかならない。講義やセミナーで系統的検索について解説すると、多くの図書館員は「それなら知っている。私もふだんやっている。」と言う。しかしその理論はまだ確立しているとは言い難い。単発的なサービスやテクニックではなく、言語化し、理論と実践の両面で伝えなければ、研究者にとって本当の力にはならない。図書館員の重要な役割の一つはこの点にあると考えられる。

講演者プロフィール

2013年まで大阪大学生命科学図書館。看護・医学系を中心に検索相談活動、講義、プロジェクト参加など。主著は『系統的文献検索概説』（近畿病院図書室協議会、2013）